

## 人生を荘厳する仕事

「老いる」とは生きることの厳しさを一身に引き受けることだ。

生きる基盤が揺らぐことだ。見る、聞く、話す、考える、動く、立つ、歩く、食べる、排泄する、といったあまりにも当然で、あまりにも平凡な、生きるために備わった力や機能を意に反して手放していくことでもある。見えない、聞こえない、話せない・・・そんな馬鹿なことがあってよいのだろうか。今まで当たり前に行っていたことができなくなる。今までしっかり立っていた筈の足元の大地が、まるで打ち寄せる波に砂が少しずつさらわれていくように侵食されていき、徐々に足場を無くしていく。この不安。この腹立たしさ。この悲しさ。「老いる」とは何と辛いことだろうか。

92歳の父は老人ホームでお世話になっている。

先日、突然、「もしあのまま家にいて、ここに入ってなかったら、今頃、俺は自殺していたかも知れん。」と父が言った。私は驚いて父の顔を見た。

数日前、父は夜中にトイレへ行こうとしてベッドから車椅子に移れず、床にしゃがみ込み立ち上がれないままその場で粗相してしまった、そこへ巡回中のスタッフが来て助けられたことを私は事務所から聞いていた。父はそのことを言っているのだろう。暗い中、床に座ったまま自分の力では動くこともできず、じっとしたまま情けないことになってしまった父の無念はいかばかりだったろう。さぞや惨めだったに違いない。父は家にいたときに起こっていたら、と考えてしまい、それは自殺したくなるような屈辱だったのかも知れない。が、老人ホームにとってはごく普通の日常のことだ。何も心配に及ばない、遠慮も要らない、というスタッフの有形無形の心遣いと手際のよい処理があったのだろう。それが父を救ったのだと思う。

どんな時でも、スタッフは自分に敬意をもって接してくれる、と父は言う。

「しんどかったですよ。これからは夜中でも遠慮なさらず呼び鈴を押して私たちを呼んで下さいね。すぐに来ますから。」

いつも笑顔で、親切にしてくれる。それを父はどれほど喜んでのことか。父の心がどれほど慰められ、老いの辛さがどれほど癒されていることか。父が晩節を、誇りを捨てずに生きることができるのは、ひとえに老人ホームとそこで働く人たちのお陰である。人間の尊厳を護り、人生を荘厳する最も尊い仕事だ。いくら感謝しても感謝しきれない。